



## 『ポーランド・ポズナンの少女たち』 田村和子;スプリスガルト友美 (著)

## さまざまな青春の物語

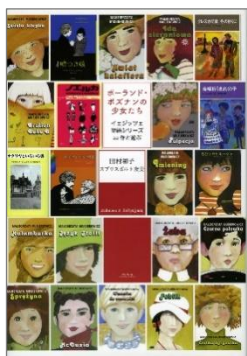
脇 明子

私は 20 年あまり前から、絵本、昔話、物語、知識の本などの「子どもの本」について、さまざまな角度から学ぶ場である「岡山子どもの本の会」を運営しているが、ポーランドの作家マウゴジャタ・ムシエロヴィチの一連の青春小説「イエジツィアード」は、欧米諸国のうちでもなじみの薄い国の物語であるにもかかわらず、仲間のあいだで大人気だし、大学で教えていたときには、学生たちに紹介すると、何人も見事に「はまった」。

このシリーズの魅力は、脇役だった人物が、ほかの作品では主人公をつとめるなど、全体がゆるやかにつながっていること。最初に邦訳されたのは、第5作の『クレスカ 15 歳 冬の終りに』だったが、その主人公が、第9作の『金曜生まれの子』では、三人の子どもをかかえたタフなお母さんになっているし、『金曜日…』の主人公の少女ゲノヴェファには、田舎町の小さな家に住む、昔話に出てくるようなおばあちゃんがいたが、第 10 作の『ナタリヤといらいら男』では、なんとそのおばあちゃんが再婚し、別棟を建てて民宿をはじめようとしている。しかもそのお相手というのが、『金曜日…』の主人公の学校用の務員だった男性で、最初は威嚇的で嫌われていたのだから、とても愉快だ。

まだ邦訳されていないシリーズ第1作が発表されたのは 1977 年だから、東欧諸国がソ連離れをはじめた時期。80 年には自主管理労組「連帯」が結成され、初代議長に選ばれたワレサが日本でも人気を得たが、翌年には逮捕されて、戒厳令が布告されるなど、遠い国の出来事ながら、一喜一憂したものだ。

田村さんによる近刊『ポーランド・ポズナンの少女たち』は、これまでに邦訳されている7作を出来事の順に並べ、当時の社会情勢にも触れつつ、内容紹介したもの。邦訳の発行順は行ったり来たりだったので、もっぱら主人公たちの悩みや喜びに共感しつつ読んでいたが、今度はもっと時代背景に眼を向けながら読み返すのが楽しみだ。



共著者のスプリスガルト友美さんは、ポーランド語を学

んでいて邦訳の『クレスカ…』に出会い、夏休みにポーランドを訪れ、その後、田村さんとの出会いを経て、なんと、ポズナンっ子の男性と結婚された女性。いまや、一連の物語の主な舞台である、ポズナンのイエジツェ地区に住んでおられるそうで、作品によく出てくる場所の写真、おいしそうな食べものの写真をふんだんに添えた、「文学散歩」の章を担当されている。(わき・あきこ、岡山子どもの本の会代表、

ノートルダム清心女子大学名誉教授、『読む力は生きる力』岩波書店ほか児童文学の翻訳多数)

## “イエジツィアード”の世界で遊ぼう

スプリスガルト 友美

“イエジツィアード”というポーランド語をご存知でしょうか。これは日本語にすると“イエジツェ物語シリーズ”とでもいえる連作の呼び名です。作者マウゴジャタ・ムシエロヴィチの友人で、シリーズのファンでもあった今は亡きポーランド演劇史の大家、ラシェフスキ教授により、古代ギリシャの長編叙事詩イーリアスのポーランド語名“イリアード”になぞらえて名付けられたとか。

“イエジツィアード”はポーランド西部の商業都市ポズナンにあるイエジツェ町を舞台にした児童文学です。ムシエロヴィチもまた同市出身で、イエジツェ町に住んでいたこともあります。1977 年に第1作が出版されて以来、世代を越えて今日までポーランド中のたくさんの少女たちに愛読されてきました。

長く読み継がれてきた理由の一つは、時の流れとともに登場人物も成長していくことにあるでしょう。各作品は独立しており、主人公の多くはどこにでもいそうな中高生の少女ですが、数年後の別の作品では主人公の母親となっていたり、逆にほんの脇役だった幼い少女が後に高校生 of 主人公を務めたりすることもあるのです。その中でルーズヴェルト通りに住むボレイコ家の人々だけは、第三作目以降シリーズを通して必ず登場しています。作品によって主人公であったり脇役であったりしますが、常に重要な役割を果たしているのは確かです。

日本では田村和子さんの翻訳で、これまでに7作品が出版されています。この4月に発行された本書は、邦訳各巻に登場する少女たちの成長を田村さんの視点から描いた7章に、2002 年よりイエジツ

ツェ町在住という経験を生かして、私が執筆した文学散歩の章を加えた全8章で構成されています。

最初の7章では、日本の読者には分かりづらい各作品の歴史的背景が説明されているだけでなく、物語のあらすじをたどりながら、所々に田村さんの訳者としての、そして一読者としての想いも散りばめられています。原作はもちろん時代順に発行されてきましたが、邦訳はそうではありませんでした。そのため、既に邦訳作品を読まれている愛読者の方には総集編として、またこれから読んでみたいと考えている方には導入としてぴったりの本ではないでしょうか。

イェジツェ物語文学散歩をテーマにした終章では、作品に登場する風景や、日本の読者の目には珍しく映えると思われる料理の数々を、写真付きで紹介しています。章の終わりには私のおススメの文学散歩コースを収録しました。掲載されている地図を見ながら、実際に歩いている気分を楽しんで頂ければと思います。

私が“イェジツェアード”と出会ったのは、ポーランド語を勉強し始めたばかりの大学1年生の頃でし

た。児童文学に関心を持っていた私に先生が薦めてくださったのが、シリーズの中で邦訳第1作目となった『クレスカ 15歳 冬の終りに』だったのです。戒厳令下に置かれた1980年代のポーランドという、私にとっては未知の世界で展開する物語だったのですが、すぐに引き込まれていきました。

在学中、その素敵な物語を訳された田村さんとお会いする機会も得ました。あれから20年という月日が流れ、遅ればせながらポズナンの大学修士課程に通って2年目だった昨春、後期のある授業のプロジェクトで『イェジツェ物語シリーズ』の文学散歩を作成しました。その話を田村さんにお伝えしたところから今回の本の執筆のお話を頂き、めでたく出版の運びとなったわけです。あの時の出会いがなければ、本書はこの世に出るにはなかったといっても過言ではないでしょう。

イェジツェ物語の中には、ハッピーエンドへとつながるたくさんのお会いが描かれています。本書を案内書として、より多くの日本の読者の方がこの幸せな物語と出会ってもらえるよう願っています。  
(すぶりすがると・ともみ、ライター・翻訳家)

角川書店、2020.4

## 『サガレン～樺太／サハリン 境界を旅する』 梯久美子 (著)

### サハリン鉄道の旅

田原 佑子

サハリンを鉄道で旅するというプランは、鉄道ファンなら誰しも旅心を誘われるだろう。日本はかつてサハリンの南半分を「樺太」として領有し、鉄道はその時代に日本が敷設したものである。大の鉄道ファンである著者も、そんな「ノリ」でサハリンへの旅を思い立ったと言う。

本書は二度にわたるサハリン旅行～2017年冬と2018年夏～をまとめた紀行文。といっても、(初めての土地を旅するワクワクした感じが随所に感じられるもの)旅情あふれる旅のエッセイとは異なる。アイヌ、ニヴフ、ウイльтаなどの北方先住民族の土地サハリンが、ロシアの進出に揺れ、さらに極東におけるロシアと日本のせめぎ合いの場へと変貌する状況が、旅の話の中に要領よく盛り込まれている。読みながら、サハリンの歴史に関する断片的な知識が頭の中で整理されてくる思いがする。「ノリ」で出かけた旅ではあるが、「サハリンは、歴史のほうから絶えずこちらに語りかけてくる土地である」と著者は「あとがき」に書く。

第一部は鉄道で行ける最北駅ノグリキまでの冬の旅。その昔、日本時代の樺太を観光した文士た

ちの旅の記録も紹介されている。とりわけ、作家・林芙美子の率直な感想が面白い。1934(昭和9)年に樺太を訪れた林芙美子のすぐれた直感がとらえた風物は、いかにも植民地的で、当時の日本における樺太の位置づけが感じ取れる。

第二部は二度目にサハリンを訪れた夏の旅。日本時代からの線路の軌間(レール間の幅)を拡張する工事といった現在のサハリン事情を伝えながらも、著者は旅の主題に迫ってゆく。それは1923(大正12)年、宮沢賢治が亡き妹の魂との出会いを樺太の地に求めた、その足跡をたどること。賢治の旅のルートの詳細になぞりながら、『銀河鉄道の夜』をはじめとするこの時期に書かれた多くの詩をてがかりに、著者は賢治の心の行方を追う。妹に寄せる賢治の深い思いと、著者の熱い探求心に、読んでいて引き込まれてしまう。

梯久美子氏のサハリンの旅はまだ終わらない。この地に織りなされた歴史とそこに登場する人々にますます興味をかきたてられ、このあと、さらに三度目の旅に出かけた



という。次は、どんな切り口でサハリンを語ってくれるのだろうか。

梯氏は現在(2020/3/25～)、岩波書店のWEBマガジン「たねをまく」に『天涯の声～プロニスワフ・ピウスツキへの旅』を連載中である。

(たはら・ゆうこ、ウラジーミル・サンギ著『ケヴオングの嫁取り～サハリン・ニヴフの物語』群像社ほかの訳者)

## 「梯号」に乗って再びサガレンへ

菅原 三栄子

五年前「サハリン国境モニターツアー」に参加。その後日常に戻り記憶も朧げになる中『サガレン』に出会った。

著者梯久美子氏は2006年『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞という快挙をとげ、その後『狂うひと「死の棘」の妻・島尾ミホ』では三賞同時受賞という偉業。(あのミホさんにこんなに迫り粘り強く取材出来たなんて)「この人は凄すぎる！大物だ！」と大ファンになった。であるからして、それと「梯号」に乗り込み再びの旅に出る。出会うは神沢利子、津島佑子、宮沢賢治、チェーホフ、ニヴフなど先住民族。会いたかった人ばかりだ。トイジという古代人や、農業学者ミツリー、鉱山技師ラパーチンも初の出会い。

日々コロナ禍で萎縮の身体と心を解放してくれた。

本作は実に行き届いた書き振りと展開であると一読して感じた。紀行文でありながら文学書でもある。謎が次々出てくる。不思議という大げさではなく楽しげに出てくる。

サハリン号の謎、昔乗った北斗星の謎、ツンドラの謎、林芙美子が国境観光を取り止めた謎…etc. 一つ一つに思い馳せ考察し推理する。人柄の良い「梯号」は焦らしたりせず帰国後古書や諸々の方法でテキパキ早めの謎解き。地図マニア、鉄道ファンを自認の面目躍如の解明も見事である。(「青森挽歌」はどこで書かれたかの謎をいともあっさりと)

しかし簡単に解けぬ謎もある。

第二部「賢治の樺太」をゆく。こちら辺から「梯号」はパワー全開。本領発揮。

一つ目の謎は、賢治の旅はトシの魂の行方を追う旅だったのか。二つ目の謎は白鳥湖に行ったのか行かなかったのか。丁寧に賢治の足跡を追って2017年から三年連続でサガレンを旅し、詩と文章を存分に引用しつつ考察。研究者の論も紹介し、ゆっくり賢治の心象風景に光を当てる。この辺り私は多く語るのはよそうと思う。とてもいい処です。どうか是非本書を手にし、自身で賢治やトシや梯さんを感じ受けとめてほしい。(旅の持つ光と闇をも)

最後に食いしん坊芙美子を買ったというロシアパン。あの白秋もロシアパン屋の家を訪れる話へと続き「樺太のポーランド人たち」の見出しで四頁にわたり協会会員必読の部分が記述されている。ムロチコフスキーを探す著者は、報告集『ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事』(北海道ポーランド文化協会ほか刊)にたどり着き、その中の「樺太のポーランド人たち」で彼を見つけ出した。さすが梯久美子さん。さすがポ文協である。

さあ、読み終えたあなた。書を捨てず旅に出よう。「梯号」に乗って「サガレン」に行こう！

(すがわら・みえこ、詩人)

『熱源』の風をうけて

## 千徳太郎治の生涯

本田 和義

直木賞受賞『熱源』に、私の曾祖母の弟・千徳太郎治が描かれて、世の中に多少なりともその存在を知って頂けたことは嬉しい限りです。千徳太郎治について、親戚には知ってほしいと思い、資料収集を始めました。今回この機会を頂き、協会の皆様にも千徳の生涯を知って頂けると幸いです。

千徳太郎治は、明治5(1872)年11月13日樺太東海岸栄浜領内淵で誕生しました。父は秋田県鹿角出身の元南部藩士「千徳瀨兵衛」、母は樺太内淵出身の樺太アイヌ「タラトンマ」。

慶應3(1867)年父瀨兵衛は鹿角に幼い長女(私

の曾祖母)と長男を残し箱館へ、翌年には岡本監輔に従い樺太に渡航しました。明治2(1869)年に栄浜詰となり内淵に家屋を建て、この頃タラトンマと知り合い事実上の結婚をしました。この時瀨兵衛32才、タラトンマ16才。明治4(1871)年2月17日女子トク、翌年太郎治が誕生。瀨兵衛は新しい家族が出来たことから、帰農願・樺太内淵永住願を樺太支庁に提出し、秋田県鹿角に残した子供や親族と決別し、樺太に骨を埋めるつもりだったようです。

明治8(1875)年の樺太・千島交換条約により、

